

## 「絆の形」

横浜共立学園高校 2年 石川幸芸

一人でいるのは、とても心細いことだ。ましてや、あの大きな揺れの中で当てもなく一人でいるのはとても心細い。

三月十一日、私は親戚の家から自宅へ帰るために電車に乗っていた。いつもと同じ日常の風景だった。周りの人々もそう思っていたに違いない。しかし、未だかつて無いほどの大きな揺れが、私たちを日常から遠ざけてしまった。初めは、私を含め周りは皆なにが起ったのか分からなかった。いつまで経っても動き出さない電車と、現れない駅員に、言しようのない不安が心の中で渦を巻いていた。そんな中、同じ車両に乗り合わせていた数人の若者がおもむろに携帯電話を取り出し、ニュースの速報を読み上げだした。ある者は音量を最大にしてワンセグのニュースを周りに聞かせ、またある者はツイッターを使って各地の被害状況をリアルタイムで私たちに知らせてくれた。携帯電話での情報を取得することのできない私にとって、それはとても助けになった。

しばらくすると、数人の駅員の方が来て、私たちは無事に避難することができた。近くの駅は電車から降りて避難してきた人たちで溢れかえっており、駅員の方はその対応に追われている。避難してきた人々は皆携帯電話を片手に家族や友人の無事を確認するため繰り返し電話をかける。一時間、二時間経っても電車が再開する気配はなく、私たちは立ち尽くすほかなかったのだが、それを見ていた駅員の方は駅を開放してくださった。三月とはいえまだまだ寒い外気にさらされていた体を駅の構内で温められるというのはとてもありがたいことであった。

それから何時間経ったであろうか。あたりが真っ暗になっても電車は一向に再開の兆しを見せない。駅で足止めされていた人々のほとんどは、同じ方向に帰る人を見つけ、交番や駅員の方に道順を教わって帰って行ってしまっていた。私はいまだに携帯電話が繋がらず、その時はお金がなかったために公衆電話も使えず、ただ電車が再開するのを祈って待つばかりであった。どうすればいいのだろうと寒さに震えて困り果てているちょうどそのとき、隣にいた一人の男性が声をかけてきた。

「携帯電話はしばらく繋がらないだろうから、公衆電話を使った方がいいよ。」公衆電話にできる長蛇の列に並ばずにひたすら携帯電話をかけ続ける私を訝しんでの言葉であったのだろう。私はその男性に、お金を持ってないため使うことができない旨を話した。すると男性は、おもむろに財布からいくらかの十円玉を出し、それを私に渡すと、それで電話をかけなさいと言ってくれた。なんとということだろう。私は男性にお礼を数えきれないほど言い、公衆電話の列へと並び、ようやく家族と連絡を取ることができた。電話から戻ってくるとその男性はもういなくなっていた。近くにいた人へ聞くと、どうやら迎えにきた人と帰って行ったらしい。名前も言わず、私に優しさを残してその人は去って行ったのだ。

家族も迎えに来られる状況ではなかったため、私はただひたすらに電車が再開するのを

待った。待っている間、普段は目にしないような様々な光景が私の目に飛び込んできていた。車を待つ人は大声で、「〇〇へ帰る方はいらっしゃいませんか。」と叫んでいる。どうやら、同じ方面へと帰る人を一緒に乗せて行くようだった。電車の再開を待つ中学生と思しき女の子は、同じように電車を待つご老人へと自分の持つホッカイロを渡していた。私も近くで同じように電車を待つ人とたわいもない話をしながら、気を紛らわせていた。その人は、不安からか寒さからか、少し震えていた。私がお金を持っていないと知ったその人はちょっと待っていてとその場を離れると、自動販売機で買ったらしい温かなミルクティーを私に、温まるからと一本くれた。その人の優しさで、私はようやく暖をとることができ、その温かさに、私は少し泣きそうになってしまった。

それから何時間も経った日付も変わる頃、ようやく電車が動き出した。私に飲み物をくれた人は、歩いて帰ると言ってずいぶん前に去っていた。ようやく帰ることができるのだと思い、ようやく安心することのできた私は駅員さんに「ありがとうございます。」と言い、電車へと乗り込んだ。駅員さんは、私の言葉を聞いて「待たせてごめんなさいね。」と言って、疲れ切った顔に笑顔を浮かべた。

自宅についたころにはもう日付が変わっていた。帰り道の途中で会った同じマンションの男性と一緒にマンションのエントランスをくぐると、地震の影響でエレベーターが止まっていた。最上階の五階にある自宅へ帰るには階段を使わなければならない。親戚から託された思い荷物を両手に持っていた私にとってそれはとても大変なことであった。すると一緒にいた男性が、家まで荷物を持ってあげるからと言って私の荷物を持ってくれた。その男性の自宅は四階なのに、私の家まで荷物を持ってくれた。

自宅へと帰ると、そこには帰れなくなった母の職場の同僚がやってきており、皆、大変だったねと私を抱きしめてくれた。私はその時はじめて、大変だったと言葉に出し言うことができた。

人と人とのつながり、絆にはいろいろな物がある。電車の中で情報を提供してくれた若者たち、家族や友人へと電話をかける人々、私に小銭をくれたあの男性、同じ方向へと帰る人を見つけようと声を張り上げる人々、私に温かさをくれたあの人、ホッカイロをあげた中学生とご老人、必死で電車を動かそうと働いていた駅員さん、荷物を持ってくれた男性、確かにあの時、私の周りの人々の間で絆は生まれていた。その時、私たちは確かにつながっていたのだ。目に見える形でのつながりもあれば、目には見ないつながりもあるだろう。あの日私は、様々な形で沢山の絆をもらった気がする。

学校で行われた被災地への募金やチャリティーイベント、有名人の方々の被災地訪問、学生が街頭に立って行っている募金の呼びかけ、世界各国から送られる祈りの言葉、インターネットの掲示板に書き込まれる応援の言葉。絆の形は一つではない。例えば被災地の方の無事を祈るだけでも、被災地の方とつながることができる。絆の形は無限にあり、いつでも私たちはつながることができるのだ。

震災から五カ月がたった今も、つながりは消えてはいない。街頭には募金箱があり、店

頭には東北支援のコーナーができています。一人でいるのはとても心細いことだ。どうしたらいいのか、言いようもない不安に駆られた時には思い出して欲しい。決して一人きりではないのだということを。私たちはいつでも心でつながっているのだから。